

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	堀 岡 喜 美 子（石 川 県）
学 位 の 種 類	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	甲 第 99 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 25 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	「巫女」の存立に関する史的研究 —民俗学と歴史学からの考察—
論 文 審 査 委 員	主 査 八 木 透（佛教大学教授） 副 査 斎 藤 英 喜（佛教大学教授） 副 査 黒 田 一 充（関西大学 教授）

〔1〕論文の概要

堀岡喜美子氏の博士の学位請求論文である『“巫女”の存立に関する史的研究—民俗学と歴史学からの考察』は、日本の歴史上において「巫女」組織がどのように存立し、かつ変容したかについて解明することを目的とした意欲的な論考である。具体的には、日本社会の歴史的変遷と「巫女」組織との関係を明らかにしつつ、「巫女」の実像の追究を試みている。内容的には、まず「巫女」の社会的役割と多様性から、柳田國男が大別した神社ミコと口寄せミコに注目し、双方に分けてそれぞれの特性を考察する。また「巫女」の社会的属性に留意し、巫女組織として巫術者を含む周縁組織を視野に入れた研究を試みている。本論は大きく第1部と第2部に分けられる。すなわち第1部は「「巫女」および「巫術者」存立の歴史的考察」として、古代より近代までの「巫女」の存立について、通史的な考察を試みている。第2部は「具体的事例の研究」として、古代・中世・近世・明治というそれぞれの時代に即した具体事例を取り上げて考察を試みている。第1部・第2部合わせて約170000字、400字換算で420枚を超す力作である。

本論文の目次構成は以下の通りである。

序 章 本論の目的と今日的意義

- 1、巫女研究における問題の所在と課題
- 2、本論の目的と構成

第1部 「巫女」および「巫術者」存立の歴史的考察

第1章 古代律令社会における「巫術者」たち

- 1、神社「巫女」の存在形態
- 2、民間の「巫術者」たち
- 3、「巫覡」についての考察
- 4、宮中御巫について

小 括

第2章 中世社会の巫女と巫術者の変容

- 1、中世神社「巫女」の様相
 - (1) 神社「巫女」の誕生
 - (2) 神社「巫女」の具体像
- 2、民間神子と多様な呪術的芸能者たち
 - (1) 神子と呪術者の様相
 - (2) 女神子優勢の背景

小 括

第3章 近世社会における巫女とその周縁者たち

- 1、神社巫女の在り様
- 2、民間神子の存在形態と周縁者たち
 - (1) 神子と修験・法者
 - (2) 神子と芸能的宗教者

小 括

第4章 明治維新「神子禁止令」の思想背景と社会的意味

－「淫祀論争」と大阪の動向より－

はじめに

- 1、「淫祀」とはなにか
 - (1) 「淫祀解除政策」と「淫祀論争」について
 - (2) 平田派国学者による「淫祀論」
 - (3) 民衆はどう捉えられていたか
- 2、大阪府の民衆の動向と「淫祀禁止令」
 - (1) 大阪の民衆の動向に対する施策
 - (2) 大阪「淫祀禁止令」の意図と変化
- 3、国民教化政策と「神子禁止令」
 - (1) 教部省設置と国民教化政策の動向
 - (2) 「神子禁止令」の社会的意味

おわりに

第2部 具体的事例の研究

第5章 中世祇園社片羽屋神子の実像－組織と職掌の特性から－

はじめに

1、片羽屋神子組織存立の歴史

- (1) 中世祇園社の組織構造
- (2) 宮籠と片羽屋の関係
- (3) 宮籠・片羽屋から片羽屋神子へ
- (4) 神子組織上昇・強化の策と組織力
- (5) 宮籠・片羽屋神子組織の特徴

2、職掌、役割の特性と属性

- (1) 職掌、役割の特性
- (2) 宮籠・片羽屋神子の神楽

3、丹生谷哲一氏の祇園社宮籠「非人説」について

おわりに

第6章 近世摂津国住吉社巫女の職掌と特性

はじめに

1、住吉社の歴史

- (1) 住吉社創始縁起と神功皇后
- (2) 中近世社会における住吉社
- (3) 神宮寺について

2、『住吉松葉大紀』 「神事部」から窺う巫女の姿

- (1) 『住吉松葉大紀』と「神事部」について
- (2) 神事における巫女の役割
- (3) 鎌倉期から元禄期への巫女奉仕の変化

3、「職役部」の「巫女」から窺う巫女の組織と役割

- (1) 「巫女」（ヤマトメ）について
- (2) 神楽所組織の在り様
- (3) 巫女組織について
- (4) 巫女の役儀内容

4、神職組織と巫女の位置

おわりに

第7章 都市に生きる近世天王寺梓神子

はじめに

1、天王寺村神子町について

- (1) 天王寺村と四天王寺について
- (2) 神子町の様相

(3) 神子町の創設

(4) 神子町創設の背景

2、神子の夫と四天王寺

(1) 神子の夫の役割と位置

(2) 林町と神子町との関係

3、近松作品に描かれた神子の様相と宗教性

(1) 神子を取り巻く状況

(2) 口寄せの様子と祭文

おわりに

終 章

1、それぞれの明治維新

2、全体のまとめと今後の課題

謝 辞

参考文献・掲載図版一覧

堀岡喜美子氏は本論文の「序章」において、神子や呪術者をめぐる先行研究について、神田より子の「巫女研究史」に依拠しつつ、今日の研究状況を踏まえ研究課題を明らかにしている。巫女研究は柳田國男や桜井徳太郎などの民俗学だけではなく、文化人類学や歴史学などからの研究も進展し、巫女の多様性と存在意義が次第に明らかにされてきた。また巫女通史も中山太郎や山上伊豆母によって試みられている。しかしこれまでの研究は、歴史の変化、動向と巫女の変容、多様性との関係が有機的につながっているとはいえないとする。この点に留意し、社会の動向を重要な視座として、巫女集団が歴史の中でどのように変容したかについて考察する。また「巫女」の表記について、主体は「巫女」とし、「神子」、「ミコ」も同様に使用し厳正な使用基準は設けないとする。

第1部第1章においては、律令社会における「巫女」と他の巫術者について、国史、官書および仏教説話などの史料および先行研究より検討する。律令社会下では地方の神社に女祝・禰宜がいたが、全神社に「巫女」と表記される神職者は存在せず、また、民間においても女巫や妖巫、卜者といった者はいるが「巫女」とする存在は見られない。また、巫覡なる存在が『日本書紀』をはじめ国史、官書に散見され、彼らは男女による巫術者集団であり、淫祀により百姓、諸衆を誑かす者として取締の対象であった。また宮廷では御巫と称される女性神職者が、呪術的祭祀によって天皇の身体守護を行っている。以上より、律令社会には多様な巫術者の存在が確認できるが、神社、民間共に「巫女」と称する存在が成立していない、あるいは未熟であったとする仮説を提示している。

第2章においては、律令社会での巫術者たちが、中世ではどのように変容するかを考察している。「巫女」は12世紀中頃より、石清水八幡宮など主に畿内の朝廷と深いつながりのある神社に現れ、宮廷祭祀の擬似的な神事に奉仕する姿が記録される。一方で巫覡とする

語彙は見られなくなり、男性巫術者たちは大寺社の華やかな祭事に呪師や巫として、また女神子は声聞師や山伏と組み、病氣治療や安産祈願にたずさわる者として現れる。そして中世社会は女神子優勢の時代であったことを提示している。律令制度の崩壊は宮廷祭祀を衰退させると共に大寺社の祭事を活発化させ、「芸能者」の取り込みを競合する。ここに宮廷の擬似的御巫としての「神社巫女」、および巫覡から呪術者や芸能者への変容があるとする説を提示している。

第3章においては、幕藩体制下の神社巫女および民間神子やその周縁者たちが、徳川幕府の宗教政策によってどのような影響を受けたかを検証している。神社巫女の実態はよくわからないが、大小の神社を問わず衰退したと考えられるといい、その大きな要因のひとつは、石高制による寺社領安堵による所領の減少であり、諸社禰宜神主法度による吉田家の神社支配の強化にあるとする。男性優位の近世社会において、民間神子の多くは山伏や神事舞太夫、夷願人などの男性組織に包摂され、活動を展開するが、幕府の統制により神子のあり様や職掌が規定されたため、組織間の相論を頻発させたことを提示している。

第4章においては、明治維新時に神子およびその周縁者たちが公的な場から姿を消した理由について、その思想的背景と大阪の動向から検証している。思想的背景については、幕末に長州藩と維新における宗教政策を主導したとされる、津和野藩で勃発した「淫祀論争」より、平田派国学者等の国史から導かれた民衆を誑かすとする淫祀、巫覡観にあることを明らかにしている。また大阪の民衆騒動と大阪府の「淫祀禁止令」・「神子禁止令」との関連から、「神子禁止令」は民衆騒動対策としての「国民教化」政策の一環であることを検証している。

第2部第5章においては、中世祇園社に存在した片羽屋神子について、その組織と職掌の特徴からその実像について考察している。片羽屋神子は宮籠と称される卑賤民の男女による組織で、祇園社の下級役人として、女性は副神楽、男性は社役および呪術的任務を担う存在であったことを明らかにし、かつ彼らは強固な組織性と神楽収入からの財源をもって、天台座主や室町幕府の要人への働きかけにより、自ら「神子号」を獲得したとする仮説を提示している。すなわち「片羽屋神子」は正統な神社巫女ではなく、呪術的芸能者集団であり、その呪術性と芸能性により神子となることを認められたとする仮説を提示している。

第6章においては、大坂の大社である住吉社の巫女集団について、元禄期に梅園惟朝が編集した『住吉松葉大記』をテキストとして検証している。住吉社巫女は恵比寿像を持った巫女を頭とする十家からなり、三十人を下らない大所帯で、その筆頭巫女は神人たちも神楽衆として所属する神楽所の運営者であったことを示す。また巫女組織は年中行事の多くに重要な役割を担うとともに、商都大坂を背景とした神楽奉納の収入により、住吉社の財政を支えるなど、極めて自立した存在であったことを明らかにしている。

第7章においては、近世摂津国天王寺村の神子町に集住した梓神子について、四天王寺文書をはじめ随筆、地誌などから考察している。神子町は近世初頭に幕府の都市政策およ

び宗教者対策により、神子たちが元々居住していた林町に集約されたものであり、神子たちは旦那場をめぐることなく、この地で営業を行い、地方の梓神子とは異なった活動形態を成していたことを提示する。また神子の夫は「林ノ者」と称される四天王寺の下級役人であり、聖霊会の獅子・菩薩等を担っていて、天王寺神子とその夫は呪術的芸能者集団であったとする仮説を提示している。

終章においては、これまでのまとめとして、巫女たちが明治維新以降どのような状況にあり、どう乗り越えたかについて概観している。また序章で提示した課題について、神社巫女と民間神子との関係性を整理し、さらに周縁組織についても時代における変容とその背景、社会的属性と女神子優勢について総括している。社会変動については、土地所有制度が彼らの存在を規定し、また社会危機時での役割について述べている。おわりに「神社巫女」誕生について改めて検証し、中世における女神子優勢の背景、近世神社巫女の事例研究の必要性を今後の課題としてあげている。

〔２〕 審査結果の要旨

本論文が巫女をめぐる歴史民俗学的研究として独創的だと思われるのは、基本的に以下の３点においてであると考えられる。

第１点として、まずこれまでの研究においてあまり取り上げられることが少なかった「神社巫女」に焦点を絞り、堀岡氏自身も序章において明言しているが、巫女の歴史の変遷を社会動向との関連において考察せんとした研究視座であろう。これまでの民俗学および歴史学における日本の巫女研究は、どちらかというところ「口寄せ巫女」に集中していたといえる。そのような中、史料が限られていることを承知の上で、あえて神社巫女の存立をメインテーマとし、かつ古代から明治期に至る、通史的視座から考察した研究はこれまでほとんど見られない。そのような意味から考えて、本研究はきわめて大胆な試みの成果であるともいえる。本論文の独創性は、この１点に尽きるといっても過言ではないだろう。

第２点として、神社巫女に関する限られた史料を懇切丁寧に検証し、粗削りながら、史料の内容に依拠して論を展開させるという、実証的な方法論による研究であると判断できる点である。後述するように、史料の読み違いが見られはするが、数少ない史料を駆使し、また新たな史料の発掘も試みて、それぞれの時代ごとに大胆な仮説を提示していることは試みとしては評価できる。たとえば天王寺の神子町の形成について、その位置を正確に知りうる地図はなく、入手可能な地図上でもその形成時期を確定するのは難しいといえよう。そのような中で、幕府の都市政策・宗教政策の一環で巫女を移住させたとする仮説は、これまでの研究では触れられていない点で評価できるといえるだろう。しかしそのことを実証的に証明するのは史料が少なく、困難な作業であることは間違いない。さらに評価は分かれるであろうが、四天王寺神子町の梓巫女の実像を探る目的で、近松門左衛門の三作品も史料として用いている点は、文学作品もある面では傍証史料として用いることができる

可能性を示した点において、民俗学の立場からは一定の評価に値するものと思われる。ただし、このような史料操作において導かれる結論は、あくまでも仮説の域を出ないことは言うまでもないことである。

次に、審査者が感じた本論文における問題点と課題についても触れておきたい。以下にあげる何点かに関して、今後の十分な検討が必要ではないかと思われる。

第1に、堀岡氏は本論中において、あくまでも「巫女」という表記にこだわる視座を貫いているが、たとえば「祝」・「覲」・「禰宜」・「御巫」・「神子」などと表記された者と「巫女」とは、その性格や職掌にいかなる相違があるのだろうか。具体的な事例を検討しても、表記の相違がその者の身分や属性、職掌に質的な違いが見いだせないような例も多くあるのではないか。ならば「巫」という表記にこだわることの意味はどれほどのものなのか、やや疑問が残る。さらに堀岡氏は本文中で「ミコ」を「巫女」・「神子」あるいは単にカタカナで「ミコ」などと使い分けているが、表記を区別する基準が必ずしも明確ではない。このような表記の問題と実際の身分、属性や職掌との相関性について、より厳密な検証が必要なのではないかと思われる。

第2に、堀岡氏は触れられていないが、古代社会において、女性司祭から男性中心祭祀に移行する段階については、歴史民俗学の研究成果として、高取正男「神道の自覚過程」の問題や、上井久義の『今昔物語集』の人身御供説話の問題も考慮する必要があるのではないだろうか。また中世社会においては、宗教歴史学において熊野比丘尼の研究が進んでおり、堀岡氏も一部では取り上げてはいるが、もっと突っ込んだ考察の必要があったのではないかと思われる。この点に関して、堀岡氏は「比丘尼は神との交流をその役割とする“ミコ”の概念規定には当てはまらない」（P72）と述べているが、この点も今後は検証する余地があるように思われる。

第3に、史料の読み間違いや解釈に間違いが散見することは問題である。特に第6章の近世住吉社の巫女に関する内容においては、検討を要すると思われる箇所が少なからず見受けられる。また、住吉社の巫女を考える上では、祭りと遊郭の遊女の間接関係を考慮する必要があるといえるだろう。現在は保存会になっているが、かつては祭りごとに大坂・松島新地、今里新地や住吉新地、堺の龍神などの遊郭が関わっていた。さらに、本文で検討されている一小路（市之小路）・大小路・開口はいずれも住吉ではなく、堺の地名であり、宿院付近に住んでいた巫女のことと思われる。巫女組織を考えるのなら、住吉周辺の巫女と堺の巫女との関係も考える必要があるのではないだろうか。

第4に、「結語」において堀岡氏は、中世において巫女が際立った存在として現れてくる要因として、必ずしも従来から指摘されてきたような「女の霊力」ではない、その他の女性の特性が巫女の重要な要件であったのではないかと述べている点である。この問題については、堀岡氏自身も今後の課題としてあげておられるが、「女の霊力ではないその他の女性の特性」とはいったい何なのか。この点を解明せずして、「ミコ」たる女性の存在の意味を論じることにはできないのではないかと思われる。特にジェンダーをめぐる問題と

関連させて、今後は十分に検討されるべき課題であるといえるだろう。

第5に、本論文では神社巫女に関して明治維新で記述が終わっており、そこで消えてしまったかの印象を受ける。いわゆる国家神道が形成されてゆく明治30年代までの間に政府が執ったさまざまな宗教政策は、近世において存在した種々の宗教者に大きな影響を及ぼしたことは想像に難くない。特に近世末まで存在した「ミコ」と称せられた女性宗教者たちが、明治政府の政策でいかなる影響を受け、それに対してどのような対処をしてきたのかを考察する意義は極めて大きいのではないと思われる。さらに本論には「民俗学と歴史学からの考察」という副題が付けられている点を踏まえると、明治以降、現代にいたるまでの巫女に関する考察が求められるだろう。たとえば、南山城地域ではソノイチ、奈良盆地ではソネッタン、大阪府内でも巫女が神社で湯立神楽を奉納する活動をしている例は少なからず存在する。そのような現代のミコに関する言及と考察も必要だったのではないと思われる。

以上のように、本論文には問題点も少なからず存在する。しかし、総じて斬新な問題意識に基づき、数少ない史料の丁寧な考察と分析、および仮説ではあるが、大胆な持論の展開に至るまで、豊かな知見に裏づけされた論考であることは間違いないと思われる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断する。